

# 人類文化史における口承文芸

大林太良

## 1) 口承文芸の起源

日本口承文芸学会の創立二十周年記念という大変おめでたい機会に、講演するよう依頼をうけましたことは、まことに光栄に存じております。野村会長から話があつたとき、大きなテーマについて話すようにとのことでしたので、「人類文化史における口承文芸」という非常に大きな題目を選びました。これからお話しすることは、先ほどの徳江さんのご講演のように緻密な具体的な話ではあります。状況証拠からこういうことが言えるのではないか、という大ざっぱな話です。これからお話しすることは、文献上のきちんとした証拠があるというわけではなく、厳密に証明することが難しい、あるいは不可能な問題ですが、理論的にはこう考えることができるというお話しをするのであることを、あらかじめお断りしておきます。

まず取り上げる問題は、そもそも口承文芸というものが人類の歴史のうえでどこまで遡ることができるか、上限はいつかという問題です。上限はいつか、ということになると、何と言つても、言語がいつから存在したかということが、決定的な条件になります。これに反対するひとはないと思います。そこで言語の起源はいつかということになると、面白いのは、最近ゴリラやチンパンジーなどの高等猿類に言語を覚えさせる実験がいろいろ行われたことです。記号を使って、何百という単語を覚えさせ、また操らせ、さらには複数の単語を組み合わせて表現することすら可能なことが明らかになりました。

それとともに明らかになったことは、猿は記号を使って多くの語彙を操ることはできても、声に出して、つまり音声言語として言葉を操ることはできないことです。それはなぜかというと、解剖学的に人間と猿とでは、喉の構造が違うからです。もつと厳密にいえば、現世人類と猿の喉が違うからです。猿、現世人類以前の化石人類、現世人類でも生まれたばかりの赤ん坊は喉頭が喉の高いところについています。これが現世人類では大人はもちろん、子供でもある程度大きくなると喉頭が下に降りて来ます。こうなると喉頭のうえに空洞ができる、いろいろな音を出すことができるようになります。現世人類つまりホモ・サピエンス・サピエンスの前の段階の人類、

ホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシス、つまりいわゆるネアンデルタル人においても、最近の研究ではまだ喉頭が十分降りておらず、そのためア、イ、ウという三つの母音をちゃんと発音できなかつたと言われています（Laitman 1984; Lieberman 1984）。

もちろんこういった研究がいろいろ問題をかかえており、また批判があることは私も十分承知しています。保存状態が必ずしもよくない古人骨、ことに喉の部分のような微妙な所の復原がどうまで成功しているのか、というような問題があります。それでも私は、大勢からみて、人類が本格的な言語操ることができるようには、やはり現世人類の段階になつてからではないか、と思つています。

それにはいろいろな理由があります。ことに重要なのは、現世人類になつてから文化が急速に発展するようになつたことです。つまり言語を使いこなせるようになつたからこそ、文化の急速な発展が可能になつたのではないでしょうか。また最近では、現世人類の入れ替え説が盛んになつてきています。つまりアジア、ヨーロッパ、アフリカに広がつて、それまでの段階の人類が、各地で進化して現世人類になつたのではなく、いまから数万年前にアフリカから出てきた集団が、各地でそれまでの人類に入れ替わつて広がつたものだという説です。ことに遺伝子の研究からこれが強く唱えられています。この立場にたてば、なぜ現世人類がそれまでの段階の人類を滅ぼして、世界に覇を唱えるようになつたのか、そ

れは文化を形成し、伝達し、また人間と人間のあいだのコミュニケーションを営むうえでの、重要な媒体であり手段である本格的な言語をもつていたからではないのか、ということを考えられます。

こうして本格的な言語の上限が現世人類の段階になつてからである、ということになると、これは口承文芸についても大変大きな意味がでてきます。つまりどんなにがんばつても口承文芸はそれよりも前には遡らないということです。人類が誕生してから五〇〇万年たつていると言われます。しかし口承文芸の歴史はそのうちのいく一部にしかすぎません。一パーセントくらいのものです。口承文芸の歴史というと、これまで漠然と幽遠の昔に遡るのだと考えられがちでしたが、じつは案外短いものなのではないか、そういうことを申し上げておきたいと思います。

現世人類が登場し、広がつたのは、考古学的にいうと上部旧石器、つまり後期旧石器時代であります。それは技術の面において、大きな発展のあった時代です。それまでは人類は一つの、単一の構成部分からなる道具しか使っていませんでした。たとえば石を打ちかいて作った打製石器を直接手で握つて使っていました。それが石器に柄を付けて使うことが始まります。石器と柄という二つの構成部分を組み合わせて、一つの道具として使うことが始まったのです。ことに投槍器のように、槍と投槍器とと一緒に使つて、はじめて機能する道具が現れました。弓矢もそうです。弓体と弦と矢の三つがそろつて初めて、弓矢は武器として機能します。こういうように、複数の構成部分を組み合わせて、一つの道具として使うことが始まつ

たことは、人類の精神活動が新しい段階に入ったことを物語っています。

つまり言語を考えても、これと対応するように複数の構成部分をまとめて一つの文章ができることがあります。主語と述語というようないいです。また口承文芸を考へても、たとえば一つの話はたいへい複数の部分を組み合わせて作られています。このように複数の構成部分を組み合わせて一つのものとして機能させることは、技術とのアナロジーから考へれば、やはり後期旧石器時代になつて始まつたか、あるいは大きく展開したことなどではないか、と思われます。こういう面から考へても、口承文芸の起源は、後期旧石器時代、つまり現世人類の段階になつてからである、と言えると思います。

## 2) 社会的階層の成立と口承文芸のさまざまなジャンルの形成

それではその後、口承文芸はどんな発展をたどつたでしょうか。これについては、上限ほどはつきりしたことは、なかなか言えないのですが、私の考へでは、大きな画期というべきものは、社会的階層が成立した段階にあると思われます。それは口承文芸のさまざまなかんじが発生したという画期です。つまり、今日、文化により民族によりいろいろなイーミックなジャンルがあります。本当の話だとか、本当でない話とか、そういうジャンルです。また他方にお

いては、エティックな範疇として、学問的分析のためのジャンルとしての神話、伝説、昔話などもあります。このようなイーミックなあるいはエティックなジャンルの多くは、社会的階層が成立した段階において初めてだんだんと形を取るようになつて来たのではない、と思われます。

たとえば伝説について考へてみましょう。世界のいわゆる未開民族の神話をみると、原古というべき時代のすぐ後は、現代になつてしまふのが多いのです（たとえばイエンゼン「一九七七参考」）。つまりこの世の初めから今日までの長い時代が、原古と現代という二つの大きな時代に分けられるという時間観念がそこにあるのです。ところがわれわれが学問的な範疇として伝説という場合、それは原古でもなければ現代でもない、その中間のいわば歴史的な時代に起きたと信ぜられている出来事が語られています。

たとえば弘法大師がこの村にきたとき、あの芋をほしいといったところ、あの芋は食えないといつて断つたため、ここのは芋は食えない芋になつてしまつたという食わぬ芋伝説もそうです。あるいはアレキサンダー大王がこの道を通つて行つたとか、歴史的な時代に問題の出来事が起きている。伝説では歴史的な時代という時間観念が存在し、確立しており、それが前提になつてゐるのです。

それではこういう歴史的な時間観念はどのようにして発生したのか、という問題になります。口承文芸の研究では、神話、伝説、昔話という分類が、学問上の分析の道具として用いられています。ところで、この三種にほぼ対応するものが実際存在しているのは、世

界的にみて、ヨーロッパとか日本のように高い文化をもつていると  
ころだという傾向があります。よく未開社会にもこの三分法がある  
じゃないか、といつて引かれるのは、メラネシアのトロブリアンド  
諸島の例です。

ところが私の考えでは、トロブリアンド諸島の例は、未開社会の  
例としてはあまり適当ではありません。第一に、トロブリアンド諸  
島はオセアニアのなかではソロモン群島から西のニア・オセアニア  
に入ります。次ぎの島が見え、これを頼りに島伝いに航海できる地  
域です。ところがポリネシアなどのリモート・オセアニアになると  
そうは行きません。そこでニア・オセアニアまではアジアから新し  
い影響がいろいろ及んでいるのです。トロブリアンド諸島はこのニア・オセアニアにあるのです。他方からいいますと、トロブリアン  
ド諸島は社会の発展のレベルでは、平等な社会ではなくて、階層差  
が現れる、いわゆるチーフダムの段階に達しています。特定の親族  
集団だけからチーフが出るのです。ですからトロブリアンド諸島の  
例をもって、いわゆる未開社会のどこにでも、神話、伝説、昔話と  
いう三分法があると思つたら大間違です。むしろ例外なのです。  
いまチーフダムということを申しましたが、この段階になります  
と世界的にみても系譜、ことにチーフ、つまり首長の系譜というも  
のが重要になってしまいます。ポリネシアのように何代も、何十代も先  
祖を遡つて、首長が優れた血筋のものである、時には神の子孫であ  
ることを証明する、あるいは主張することが盛んに行われるようにな  
ります。」の場合、原古と現代の間に長い歴史時代があり、存在

したと信ぜられる具体的な人名が、この歴史時代を表しているので  
す（なお Assmann 1992: 70-71 を参照）。そう見えてくると、このよ  
うな系譜と伝説とは、同じ時間観念に基づき基礎をおいていることが分かる  
と思います。

これと似たようなものとして頓知話があります。日本でいうと曾  
呂利新左衛門、吉四六（きっちよむ）を主人公とした話が有名です  
し、イスラムの世界にも多く、中国ですと新疆ウイグル族のエベニ  
ディの話、またモンゴルではシャガグダルの話などがあります。こう  
いう頓知話は多くの場合、支配者をからかっているし、あるいは頓  
知話の形で支配者を批判しています。モンゴルのシャガグダル話の場  
合、ラマ僧の横暴、清朝の支配といったさまざま圧迫があつたとい  
う状況のなかで生まれたことは、モンゴル文学の大家ヴァルター・  
ハイシッヒ先生も指摘しております（Heissig 1986: 21, 304-305）。

こういう支配と圧迫という状況下で頓知話が発達することは、他の  
文化においても言えることではないか、と私は考えています。  
社会的階層の発生と関連した口承文芸のジャンルの一つとして、

そのほかさらに頌歌があります。偉い人や神様を褒めたたえる歌であります。一般人民とは違う身分の支配者が現れ、それを称える歌がつくられ、さらに頌歌を作ることが、神々にも適用されるようになつたということは、すでにドイツの民族学者プロイスもかつて論じたところでした（Preuss 1937: 131-132）。

また階層制のある社会の出現とともに歩調を合わせるように現れてきた傾向は、宇宙への関心の高まりです。それはどういうことかと申しますと、世界の諸民族の神話を調べてみると、世界の起源、宇宙の起源を語っていない民族が、けつこうたくさんあります。いわゆる未開民族といわれる人たちの多くがそうなのです。もちろんもつと高い文化から宇宙の起源の神話が入ってくるという場合もありますが、大勢としてはありません。つまり、宇宙が存在する、世界が存在することは、いわば大前提なのであります。この前提自体を問おうとはしない。すでに存在している宇宙なり、世界なりで、それから先どんな出来事が起きるかに関心があるのです。そういう展開の仕方なのです。

これにたいして、宇宙の構造が、たとえば空間的に四分構造をとっているとか、宇宙や世界がどのようにして出来たのかに大きな

関心を示し、宇宙卵や原初巨人の死体からの宇宙や万物の起源をかたなるなど、宇宙起源神話が発達しているのは、やはり新旧両大陸の古代文明地域とかその影響圏であります。あるいはポリネシアのようにもう一息で古代文明の段階に達するようなところです（たとえば Frobenius 1929 を参照）。つまりかなり高度に発達した文化のと

ころなのです。人類起源神話については、もつと未開な文化にも広く見られ、恐らくかなり早くから始まつていたのでしょうが、宇宙の起源ということになると、あまり興味をもつていないのが、いわゆる未開文化の多くです。

もうひとつ昔話についても、似たような背景が考えられます。前世紀の末から今世紀の始めにかけて、昔話はいつから始まつたのか、どんな文化、どんな民族が最初の担い手だったのか、についての昔話起源論がはやつたことがあります。ヨーロッパの学者の代表的な学説をいくつか挙げてみると、たとえば、ドイツの民俗学者ボイケルトは新石器時代の東部地中海に昔話は発生したのだといい、スエーデンの民俗学者フォン・シードウは始めは印欧語族説でしたが、のちに巨石文化説を唱えました。ドイツのオットー・フートも巨石文化説でした。これにたいしてオランダの古代ゲルマン研究家として有名なヤン・ド・フリースは、ホメーロスの世界のような神々から離脱の時期が昔話発生の時期だと論じ、スエーデンのリウンクマンはオリエンント起源を考え、アールネはもつと一般的に、ごく未開な時代ではなくて歴史時代になつて昔話が発生したのだと考えました。

これらの説は一見さまざまではありますが、全体を眺め渡してみると、一つの共通したことがあります。それはだれ一人として昔話がごく原始的な文化の段階に発生したとは言つていないことです。どれをとっても、かなり発達した文化、かなり発達した社会に発生の母体を求めていることです。それは、私の考えでは、やはり正し

いのではないかと思います。ただここで注意しておかなくてはならないことは、すでにフォン・デア・ライエンも言っていることです。個々の昔話のモチーフの起源と、ジャンルとしての昔話の起源とを混同してはならないということです。つまり昔話でつかわれる個々のモチーフについては、なかには大変古いものもあるかも知れません。しかし昔話という口承文芸のジャンルが成立したのは比較的新しい時代であり、かなり発達した社会や文化を母体にしているということなのです。また今日語られている昔話の多くも、おそらくその成立は比較的新しいものでしよう（大林 1987: 6-9）。

### 3) 地域の伝統

今まで私は人類社会の段階、人類文化のレベルという視点から口承文芸の発達を考えてきました。たしかにこれは一つの有効な方法です。けれども、このやり方は万能ではありません。段階だけではうまく説明がつかない地域差というものがある。それはどういうものかと言うと、ことに新旧両大陸間の相違です。つまりアジア、ヨーロッパ、アフリカ、オセアニアの旧大陸と、アメリカ大陸つまり新大陸の間には、口承文芸において重要な相違があるということです。

アメリカ大陸には、ティエラ・デル・フエゴの住民など採集狩猟民もいましたし、アマゾン川の流域の住民の多くのような未開な農耕民もいれば、マヤ、アステカとかインカのような中南米の古代国

家を作った民族もいました。つまり、ごく未開な民族もいれば、社会的階層をもち、国家をもつてた民族も、またその中間の段階の民族もいました。ということは、アメリカ大陸は、旧大陸におどらす。それにもかかわらず、新大陸と旧大陸の間には、口承文芸のジャンルという点にかんして、大きな相違があることは、アメリカの人類学の基礎をつくったフランツ・ボアズがすでにいろいろな機会に指摘したところです。

たとえば謡というジャンルがそうです。「光陰矢のごとし」とか「時は金なり」といった謡は、旧大陸には広く分布していますが、新大陸にはないのです。謡もそうです。ボアズによると、アジアからの影響がいろいろな形でおよんでいるアラスカのユーコン川と、またラブラドルのイーストイ（エスキモー）のような例外と、ヨーロッパ人が持ち込んだと思われる例を除くと、アメリカ大陸の原住民のところからは謡は報告されていないのです。謡とか謎というと世界中どこにでもある、人類普遍的な口承文芸のジャンルだと思いがちですが、そうではなくて、旧大陸の口承文芸の特徴なのです。旧大陸では謡や謎は、高い文明のところばかりでなく、未開民族といわれるひとたちのところにも、けつこう広がっているのにたいし、新大陸ではインカとかアステカといった高い文明をもつたところにも、謡や謎はなかつたのです。

ボアズがあげた旧大陸にあつて新大陸にないジャンルは、そのほか叙事詩と教訓的な動物寓話があります。つまりアメリカ大陸にも

歌はあるし、いろいろな話はあります。しかし叙事詩はないのです（以上 Boas 1938: 598-599）。また動物昔話で、動物の形や習性、自然現象のさまざまの形態の説明としての動物昔話は世界的に分布していますが、教訓を伴った寓話の形をとっているのは旧大陸にしかなく、新大陸はないのです（Boas 1940: 495-496）。

ボアズがこういうことを書いたのは、もう六〇年近い昔のことです。その後の研究を私はきちんとフォローしている訳ではありませんが、その後の研究でボアズの考えがひっくりかえってしまった、というようなことは聞いていません。ですから、たとえ

こしは例外があったとしても、こういう分布の大勢は動かないことがあります。またこの分布の違いの解釈にしましても、ボアズがすでに言つておりますように、こういうジャンルは旧大陸における発明なのであって、それは旧大陸の内部には相当広がったが、新大陸にまでは及ばなかつたのだと思われます。そういう解釈が私にも一番穏当だと思われます。

ですから人類の口承文芸の歴史を考える場合、確かに社会の発展段階、ことに社会的階層があるかないかは、重要な要因だと思います。高文化地帯における宇宙論の発達もまた重要な要因です。しかし、それと並んで、たんなる段階論だけでは説明がつかない、地域差があり、口承文芸の歴史の研究には、この地域差も考慮にいれなくてはならないのです。

このように新大陸と比べると旧大陸は大きな共通の特徴をもつています。それならば旧大陸のなかは一色かというと、決してそうで

はありません。たとえばスティス・トンプソンの『民間説話』という昔話の古典的な概説書がありますが、その第二部は「アイルランドからインドまでの民間説話」という題がついていまして、この範囲が、一つの地域をつくること、そしてそこがまさに世界でも昔話がもともと華麗な花を咲かせた地域であることが論ぜられています（トンプソン 1977 上）。たしかにアイルランドからインドまで一つの世界をつくること、魔法昔話が発達しているなどの共通性が高く、東アジアに来ると、ある程度は共通した話やモチーフはあるものの、ぐっと共通性はおちてきます。

ただここで重要なことは、インドから西の世界と比べて、東の世界は西にあるものがないという、ネガティブな性格だけで特徴づけられているのではないということです。インドから西の世界にたいして太平洋をめぐる地域には、西ではない共通の話型やモチーフで独自の伝統があつたことが考えられるのです。こういう東西の伝統の並立については、すでにドイツの民族学者レオ・フロベニウスが一九三八年、つまり彼が亡くなる直前に論文を書いています（Frobenius 1938; 紹介は大林 1975: 70-84）。

つまり、東の太平洋地域の伝統を表す話としましては、日本の海幸山幸神話における《失われた釣り針》型の話があります。失われた釣り針をもとめて海の世界に行き、とりもどす話です。またやはり東の伝統に属する話のなかには、日本で言うと頭白（はずはく）上人型の話があります。墓に葬られた妊婦が墓のなかで子供を出産し、のちこの子供が偉くなる話です。日本の墓のなかから死んだ

母が飴を買って来て、いどもにしゃぶらせますが、中国では母はウドンを買って来てたべさせる、というように育て方は地域によってさまざまですが、基本的には筋は同じです。

このような東の話にたいして、西の話としましては、たとえば魔法の食卓があります。御馳走よ出る、と言うと、たちまちテーブルのうえにさっと御馳走が並ぶというモチーフは西のものです。また「開け胡麻」というように呪文を唱えると扉が開くというモチーフもまた西の伝統です。

このように旧大陸の内部でも東と西の対立があります。ただその場合、東の伝統はさきほど太平洋をめぐる地域と申しましたように、アメリカ大陸にも分布が及んでいることをつけ加えておく必要があります。それから、東と西という点からみて面白いのは、天父地母の神話です。父なる天と母なる大地が引き離される話は古代ギリシアにもありますが、大きく見るとインドネシアからポリネシアにかけての太平洋地域において発達している。すでに沼沢喜市氏も論じたように、日本のイザナキ、イザナミの神話もその一例であります。ですから天父地母の神話は、東西にわたっているが、どうも東のほうに重点があるらしい。それはなぜなのか、というような問題もあります。

これはやはり、世界的にみて、創世神話において男女二柱の神が協力しあって万物を生み出し、作り出したという観念が太平洋地域において発達しているとの関係があると思います。これに反して、西の地域では『旧約聖書』の創世記のように、男の神が一人で創造

する形式が盛んなのです。だから天父地母の神話が東で盛んなのは、東という西との間ににおける基本的なイデオロギーの違いを反映しているのかも知れません（大林1996）。

旧大陸のなかの奇妙な分布の例として、今世紀の始めにドイツのハインリッヒ・シュルツが指摘し（Schurtz 1900: 525-526）、そのあとデンマークのビルケット＝スマスも気づいたものがあります（Birket-Smith 1962:436-437）。それは詩における韻の分布です。つまりスカンジナビアからモンゴルにかけては頭韻が発達し、これにたいして東南アジアからポリネシアにかけては脚韻が盛んです。しかも、それはそれぞれいろいろな語族にまたがって、見いだされる傾向なのです。これは東西の相違とも言えるし、あるいはむしろ南北の相違と行つたほうがより適当かも知れません。なぜそうなのにはよく分かりませんし、また誰も本格的に研究したということは聞いていません。いろいろな言葉ができないと本格的に研究できないでしょうから大変ですが、誰かがやつてもらいたいテーマです。

言語学は私は素人ですが、近年はロシアの学者がノストラティクというような、印歐語族もアルタイ語族も、イヌイット（エスキモー）語も含むような巨大語族の仮説を出しています（Kaiser and Shevoroshkin 1988）。その当否は別にして、いくつもの語族にまたがるような大きい地域を、口承文芸の分野でも、今後はもっと取り上げていくのがよいのではないでしょうか。

#### 4) 口承文芸の落日

口承文芸の世界は楽しい、魅力あふれる世界です。ですから私もこれまでいろいろな形でその研究にかかわってきました。けれども客観的に考えてみると、口承文芸はその歴史的使命を終え、口承文芸の時代はすでに終わったか、あるいは終わりつつある、というのが事実ではないかと思います。

これには二つの大きな要因があります。一つは口承文芸の個々のジャンルを担つて来た社会的集団、あるいは社会の層というものがなくなってしまったこと、あるいはひどく変質してしまったことです。例えば、今まで昔話を伝承していた農民がいなくなる、あるいはすっかり変質してしまったことです。神話にしましても、王家や支配者層で伝えられて来たものは、王家や支配者層が没落すれば、もう伝承されなくなってしまう。また英雄叙事詩というものを考えてみましても、これは旧大陸の騎馬民族のところで頗著に発達しました。しかしもう昔ながらの遊牧騎馬民の生活様式はそのままの形では、だんだん維持できなくなっています。ことに英雄叙事詩は騎馬民社会でも、階層制が発達し、王者や支配者のいわば宮廷が営まれていたところが、発達の母胎でした。ところがその母胎がもうなくなつて来ています。今日でも内陸アジアの牧畜民のところでは一篇が何万行という大叙事詩が残っています。テュルク系民族のところのマナスだと、モンゴルのゲセルやジャンガルです。それ

ならば、今後もそういう大叙事詩が生み出されるかといふと、それはもうほんと期待できません。もう叙事詩の時代は終わったのです。英雄叙事詩が末路を迎えているのは、なにもアイヌのユーカラだけではありません。世界的な現象なのです。

第二の要因は、何と言つてもみんなが文字を使うようになったことです。文字が登場してからも長い間、文字を使う人たちと、文字を使わない集団や層が併存していました。そういう状況のなかでたとえば農民のお婆さんが、昔話を語つていたのでした。ところが今日では、子供は昔話を本で読むか、あるいは大人に読んでもらうのです。私の子供のときがもうそうでした。そしてこれは日本だけのことではなくて、世界的な動向なのです。

もちろん、このような状況のもとで、世間話のようなジャンルはなくなつたりすることはなく、生産性を保つて行くでしょう。しかし伝統的に重要だったジャンル、例えば、昔話、伝説、神話、英雄叙事詩といったジャンルにおいて、今後傑作や名編が生み出される見込みは余りないというのが、正直なところであります。

日本口承文芸学会の二〇周年というおめでたい機会に、こういう結論を出すのは、どうも心苦しい次第ですが、人類文化史における口承文芸という題を掲げた以上、初めから終わりまでお話ししませんと、体裁をなしませんから、あえて私見をもうあげたわけです。いやそんなことはない、口承文芸はこれからどんどん栄えるのだ、という反対のご意見を伺うことができれば、私としましても、大変うれしく思います。

ムルマヌル・ムルマヌル・ムルマヌル

- Lieberman, Philip 1984 *The Biology and Evolution of Language*. Cambridge: Harvard University Press.

アーマン、ヤン 1992 *Das kulturelle Gedächtnis, Schrift, Erinnerung und politische Identität in früheren Hochkulturen*. München: C.H. Beck.

Birket-Smith, Kaj 1962 *Geschichte der Kultur*. München: Südwest-Verlag.

Boas, Franz 1938 *Literature, Music, and Dance*, in: F. Boas (ed.), *General Anthropology*: 589–608. New York: D.C. Heath and Company.

.....1940 *Race, Language and Culture*. New York: Macmillan.

Frobenius, Leo 1929 *Monumenta Terrarum* (Erlebte Erdteile 7).

Frankfurt am Main: Frankfurter Societäts Druckerei.

.....1933 *Das Archiv für Folkloristik*, in: *Paidéuma*, I: 1–19.

Heissig, Walther 1986 *Mongolische Erzählungen*. Zürich: Manesse Verlag.

→ ハルハ・アル・ルル 大林太郎訳『蒙古の物語』(1977)『新編蒙古の物語』(1987)

Kaiser, M., and V. Schovoroshkin 1988 *Nostratic*, in: *Annual Review of Anthropology*. 17: 309–329.

Laitman, Jeffery T. 1984 *The anatomy of human speech*, in: *Natural History*, 93 (8): 20–27.

Meuli, Karl 1954 *Herkunft und Wesen der Fabel*. Basel: Schweizerische Gesellschaft für Volkskunde.

大林太良 1971 『神話と神話学』 大和書房

1987 「民謡説話総説」(世界を観察) 大林太良編『民謡説話の研究』 1—1K' 京都・河出書房

1992 「天父地母の神話—太平洋地域を中心として」『日本女子大学教養特別講義 第110集 (平成12年) 日本をみぐる民族』 H1—K1' 日本文庫大賞

Preuss, Konrad Theodor 1937 *Die Kunst der Naturvölker. a Die Dichtung*, in: K. Th. Preuss (Hrsg.), *Lehrbuch der Völkerkunde*: 124–134. Stuttgart: Ferdinand Enke Verlag.

Schurz, Heinrich 1900 *Urgeschichte der Kultur*. Leipzig: Bibliographisches Institut.

→ ハルハ・ルル 萩木博之 古原継代訳 1977 『民謡説話総説』(教養文庫) 社会思想社